さんけん新聞

発　行
ＮＰＯ法人
三段峡―太田川
流域研究会
（代表・本宮炎）

〒731－3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木 1734
☎090・
3421・3046

中山間地域振興プロジェクト：ロボサバＨＩＲＯＳＨＩＭＡ

ＩＴ技術学び 三段峡で自然体験

ロボット製作受講　七月末に正確さ競う競技会

豊かな自然環境の中でロボット製作・プログラミングを学ぶ「中山間地域振興プロジェクト：ロボサバＨＩＲＯＳＨＩＭＡ」が六月十八日と七月二日、広島市内などから六組十五人の親子が参加して開かれた。三段峡ホテルでロボット製作を受講し、三段峡で自然体験をした。江田島市会場を含め五回開催。

広大さんけん部員にサポートされて
ロボット製作を学ぶ子供達

参加者はロボットやパソコンの基盤製作、プログラミングを学んだ後、三段峡でポイントラリーやアマゴのつかみ取り、川遊びを楽しんだ。広大さんけん部の四人が講座でのテーブルサポートと自然体験の企画・実施で協力した。「自然体験の企画もプログラミングもいい経験になった」と、振り返っていた。最終回の七月三十日には広島市内で競技会が開かれ、各自がプログラミングしたロボットの動きの正確さを競う。

主催はＩＴや建設分野の人材派遣会社・夢真ビーネックスグループ。広島県が昨年実施した里山エコシステムでの視察がきっかけに

◇　◇

■ロボサバ　ロボットサバイバル　プロジェクトの略。ＰＣＮ仙台の荒木慶彦氏が考案したプログラム学習カリキュラム。「作る・学ぶ・競う」を基本にＩＴ技術を学ぶ。各種の競技会が開かれている。

なり、中山間地域の振興とＩＴ人材の育成を目的に企画された。プログラミングはＰＣＮ仙台、自然体験はさんけんと江田島市の一般社団法人フウドが担当する。今後、継続的な実施が予定されている。

二〇二二年度通常総会開催

ビジターセンター案に活発な意見

二〇二二年度通常総会が六月十七日、三段峡ホテルで開かれた。正会員三十三人のうち、委任を含め十七人が出席した。事業報告と決算、計画と予算がそれぞれ全会一致で可決された。

本宮炎理事長は「今年度の主要事業としてビジターセンターを秋にはプレオープンしたい」と述べた。総会後、委託業者からセンターの図面や仕様が示され、出席者からは展示のあり方や内容、誘客、センターの名称などについて活発に意見が出された。

総会前の午前中には十四人が参加して「理事と歩く会」が正面口―女夫淵間で開かれた。コケや草花、カタツムリ、景観などについて詳しい理事や広大さんけん部の学生が解説した。

一口メモ

▼最短の梅雨

雨量が少なかった四月、五月に続き、梅雨が異常に短かった。中国地方の梅雨入りが六月十四日ごろ、開けは二十八日ごろ。一九五一年の統計開始以来、梅雨明けは最も早く、六月は史上初と言う。三段峡の水位は落ち、茶色のコケが増え、アユの生育は遅いようだ。正面口の河原では川遊びの人が増えてきた。綺麗な川底、夏らしい清流になって欲しい。

山村留学の加計高生　思い語る

楽しい100人特別編　町民と和やかに交流

「あきおおたの楽しい１００人特別編」が六月二十六日、新築された加計高校学生寮・人材育成交流センター「黎明館」で開かれ、山村留学している寮生七人が登壇した。「出身地で受け入れられていないと思い、転機の場を探していた」「雰囲気が良かった」など同校を選んだ理由を挙げ、挨拶してくれたり、話を聞いてもらったりする町の良さを語った。聴衆からは、休日の過ごし方などの質問があり、和やかな交流になった。

同校と町の魅力再発見を狙った企画。大江達也寮長は「住民との初の交流になった」と喜んだ。「Youtube あきおおたの楽しい１００人」で視聴できる。

オオヤマレンゲ・サラサドウダン

恐羅漢山系でモニタリング調査

恐羅漢山と旧羅漢山で六月十一日、さんけん会員の折井美由紀、千恵子夫妻の案内でオオヤマレンゲとサラサドウダンのモニタリング調査をした。二〇一九年に始まり四年目。さんけん会員の上野吉雄さんや町内の小学五年生伊藤儀斗君ら六人が参加した。

満開のサラサドウダンはこれまでで一番の咲き具合だったが、オオヤマレンゲは他の木が育ち、花付きが悪いのではないか、と折井美由紀さんは指摘した。調査はフィールドワーカーの育成も目的にしている。

三段峡の鳥たち ⑧

キビタキ

涼やか 森の名歌手

伴侶巡り オスは激しく縄張り争い

四月末から五月初旬にかけて東南アジアから県内の山間部へ渡来する夏鳥。樹洞に枯れ葉を敷いて巣を構え繁殖する。「ポッピリリ、ポッピリリ、ツクツクオーシ」と涼やかな声でさえずり、黄色が目立つ衣装が美しい。三段峡では正面口から三ツ滝まで、全域で見られる。

営巣地へ到着するとオス同士は、激しい戦いを繰り広げる場合が多い。森林で昆虫を捕食するキビタキにとって縄張りの確保は、死活問題だからである。失敗すると伴侶を得られず、子孫を残せない。

オオルリやサンコウチョウと同様、フライングキャッチングで虫を捕らえる。三段峡には水生昆虫のトビゲラ、カワゲラ、カゲロウなどが多く、それらの成虫が羽化して飛び回ると格好の獲物になる。

抱卵するのはメスだけで、サンコウチョウのように、オスは一切手伝わない。オスはその間、縄張りを守るため懸命にさえずっている。ふ化すると、やっとオスも餌を運ぶようになり、子育てに参加する。

ヒナが大きくなる八月下旬には、南の国へ向けて移動が始まるのだが、親鳥が先に出発してしまう。残された幼鳥たちは体力をつけてから後を追う。「親はなくとも子は育つ」と言うが、厳しい旅立ちではある。（上野吉雄）

この人

川で育った「川の達人」

柏原　保男さん

子供のころから魚とりに夢中で、故郷を離れても川を通じて安芸太田町と関わり続けてきた。10年前にＵターンして現在は三段峡漁業協同組合長。「川に育ててもらった」と話す、根っからの川の達人だ。

三段峡との関わりも濃密。「三段峡は趣味と生活の場。高校のころは黒淵の渡船でアルバイトをし、釣ったアユを売るなど、お金には困らなかった」と笑う。さんけんとはこれから「中国種との交雑が懸念されるオオサンショウウオなどのため、河川の環境整備に協働して取り組みたい」と話す頼もしい存在だ。（炎）